

海外学術調査総括班平成 18 年度派遣 出張報告

倉沢愛子（慶應大学）

報告者は、平成 18 年 11 月 19 日から 27 日まで、フィリピンに出張し、ミンダナオとマニラにおいて、現地の大学の学術状況を調査した。なお、マニラにおいては、特に大学を訪問せず、ミンダナオの二大学関係者で、マニラ在住者へのインタビューを行った。以下セイヴィア大学とミンダナオ国立大学に関する調査報告である。

（1）セイヴィア (Xavier) 大学

概要

セイヴィア (Xavider) 大学は、ミンダナオ島北部のカガヤン・デ・オロ (Cagayan de Oro) 市に位置するイエズス会系のカトリック大学である。最初は 1933 年にアテネオ・ドゥ・カガヤン (Ateneo de Cagayan) という名で高等学校として設立されたが、1938 年に大学を併設した。アテネオ・ドゥ・マニラ (1859 年創立)、アテネオ・ドゥ・サンボアンガ (Ateneo de Samboanga)、アテネオ・ドゥ・ダバオ (Ateneo d Davao)、アテネオ・ドゥ・ナガ (Ateneo de Naga) とともに「アテネオ・ネット・ワーク」を形成している。

アテネオ・ドゥ・カガヤンは、1951 年に正式名称をセイヴィア大学と変更したが、いまだにアテネオ・ネット・ワークの一員として留まっている。また同窓生達は、アテネオの名称により愛着を感じているため、この古い名称も併記して使われている。

所在地

セイヴィア大学が位置するカガヤン・デ・オロ市は、ミサミス・オリエンタル州の州都で、マニラからは空路 1 時間 20 分。エア・フィリピン、フィリピン・エア、セブ航空が一日何便も運航している。まもなく国際空港が開設され、韓国からの便が発着する予定だと聞いている。人口約 46 万人。カガヤン川沿岸に位置し、その名は「黄金の友情の都市」という意味である。1930 年代からこの町にデルモンテ・フィリピン社の本社が作られ、近郊で果物栽培をてがけている。この町にはミンダナオで最初のカトリック大司教 (Archdiocese) が任命された。

セイヴィア大学の学部

セイヴィア大学には、農学部、商学部、教育学部、工学部、看護学部、産業技術学部、教養学部 (Art & Science) の 7 学部のほか、アメリカ風に Graduate School が単独の組織として存在する。また大学院レベルの医学部と法学大学院 (Law School) がある。また大学のほかにはプレスクール、小学校、高等学校が併設されている。

学生の宗教的バックグラウンド

カトリックの大学ではあるが、近くのラナウ湖周辺には多くのムスリムが居住していることもあり、ムスリム学生の割合も多い。(7-10%程度といわれる。)たとえば医学部では37人の医学部一年生中、11人がムスリムである。学内でもヴェールをつけている女性はしばしば見受けられるが、一步キャンパスを出ると、その数はもっと多い。キャンパス内にムスリムの礼拝所が設けられている。大学のすぐ近くに、ムスリム・レストランがあり、そこがムスリム学生の溜まり場になっている。しかし、学内のカフェテリアの食べ物はハラールではなく、そういった点ではムスリム学生への配慮は余りなされていなかった。

なお、ムスリムと同じ位の%のプロテスタント学生も在学しているが、プロテスタントのチャペルはないので、彼等は大学当局に抗議しているという。

留学生

日本人の学生は医学部に在籍する松井恵一君 1名だけである。あとは、韓国人 10名弱 (Arts and Science)、ベトナム人 5名程度、スーダン人 1名 (Engineer) などがいる。

日本人教員は 1名 (マリア会からの派遣の修道女) おり、Campus Ministry で黙想会などの運営を担当している。

日本との学術交流の可能性

日本の大学との姉妹提携は特にないが、イエズス会の大学なので、上智大学、エリザベート音楽大学 (広島)、栄光学園、六甲学園、広島学院高校など、同じイエズス会系の大学とは関係が深い。

アントニオ・モレノ (Antonio F. Moreno, S.J) 神父 (Office of Vice-President for Social Development, Dean, College of Art & Science) によれば、現在残念ながらまだアジア研究は盛んではないが、近年、韓国人の在留者が非常に増えてきており、韓国系のレストラン、ホテルなどがオープンしているため、韓国についての学習に関心が集まっている。大学で韓国研究をスタートさせる可能性もあるということであった。

現在日本研究はおもに、マニラの大学がほとんどであるが、ミンダナオは日本の開発援助の指定先でもあるので、それ故に、日本研究、東アジア研究などが拡充できればよいと思うということであった。

この大学で、周辺アジア諸国との関係をもっとも強くもっているのは、東南アジア村落社会指導研究所 (SEARSLI: Southeast Asia Rural Social Leadership Institute) というプログラムである。これはすでに 40 年の歴史を持つもので、農学部 (College of Agriculture) と提携して実施されている短期研修プログラムである。故ウィリアム・マスターソン (William Masterson) 神父によって開始されたプログラムである。各国から学生がきて開発、指導力、マイクロ・ファイナンスなどを学ぶ。これまでに多くの研修生を受け入れて

いる。費用は宿舍込みで月額 1000 ドル。現在 30 名ほどが参加している。

カガヤン・デ・オロ市内の他の大学

カガヤン・デ・オロ市には、セイヴィア大学のほかには科学技術アジア大学、カガヤン・デ・オロ大学、ロウデス大学カガヤン・デ・オロ校、フィリピン女子大学、AMA コンピューター大学カガヤン・デ・オロ校、S T I 大学カガヤン・デ・オロ校などがある。

聞き取り対象者

アントニオ・モレノ教授 Prof. Antonio F. Moreno

Vice President for Social Development

Dean of Faculty of Art and Science, Xavier University

ヌルシダ・ウンガ・アロント博士 Dr. Nursida Unga Alonto

Xavier 大学医学部講師

アルト・スルディラ教授 Prof. Dr. Art Surdillas

Xavier 大学医学部教授 留学生担当学生部長

ランパ・パンディ医師 Dr. Lampa I. Pandi

Xavier 大学卒

ムスリム自治地域政府 (Autonomous Region in Muslim Mindanao) 保健省役人
公衆衛生に関する日本との共同調査希望

マルシー医師 Dr. Marsee

Xavier 大学講師

松井恵一

Xavier 大学医学大学院留学生

(2) ミンダナオ国立大学 (Mindanao State University, MSU) www.msu.edu.ph

2006 年 11 月 21 日から 23 日までミンダナオ国立大学を訪問した。これはミンダナオ島のマラウィ (Marawi) 市に存在する大学で、ムスリム学生の割合が非常に多い。

マラウィ市は、ミンダナオ島北部に位置し、マニラからカガヤン・デ・オロ市まで空路行ったのち、そこから陸路南西方面へ約 3 時間の所に位置している。フィリピンで二番目に大きいラナウ湖を見下ろす高地にある。この湖周辺の種族はマラナオ (Maranao) 族と呼ばれるムスリムである。マラウィ市は人口に占めるムスリムの割合がフィリピンでもっとも高い市で、キャンパス外でのノン・ムスリム居住者はきわめて少ない。

MSU はキャンパス・システムをとっており、マラウィにある本部のほか、ラナオ・デル・ノルト州のイリガン市とマギオ市、ミサミス・オリエンタル州のナアワン市、タウィ・

タウィ州のボンガオ市、スルー諸島のホロ市、南コタバト州のジェネラル・サントソ市、ならびにマギンダナオにキャンパスがある。

本報告はそのうち本部のマラウィにあるメイン・キャンパスでの状況に関するものである。

MSU は 1962 年にドモカオ・アロント (Domokao Alonto) 上院議員が上程した法案に基づいて設立された。元フィリピン大学の副学長であったアントニオ・イシドロ博士 (Dr. Antonio Isidro) が創設者兼初代学長であった。1962 年に開講した時は三つの中核学部、すなわちコミュニティ・デベロップメント、教養、教育の三学部で発足し、学生数 282 名、教員数 19 名であった。現在はマラウィ・キャンパスだけでも 17 学部が存在し、マレーシア、インドネシア、オーストラリアの所大学との提携を行っている。特にブルネイ・インドネシア・マレーシア・フィリピン間の教育提携 (BIMP=EAGA) に際しては、フィリピン側を代表する中核的な大学になっている。

これはムスリムをメイン・ストリームとして統合していくという文化的統合を目指して作られた唯一の大学である。すなわち、その背景には、当時まだ国立大学への入学が制約されていたムスリム青年達に大学教育の機会を与えるべく、ラナオ・デル・スル (Lanao del Sur) 州選出の下院議員ドモカオ・アロントが努力して、マラウィ市での大学創設のための草案を上程したと言われる。

初代の学長にはノン・ムスリムが任命されたが、その後の学長は主としてムスリムから選ばれた。しかし現在 (2005 年から) 再び、ノン・ムスリムが学長に選ばれている。アロヨ大統領の遠縁にあたる元軍人で、リカルド・F・ドゥ・レオン (Dr. Ricardo F. de Leon) 博士である。縁故人事といううわさも強い。

さて、この大学における東南アジア関連の教育・研究状況であるが、そのひとつの中心はキング・ファイサル・センターである。ここは国際関係学とイスラミック研究が中心である。マレーシアの国際イスラーム大学 International Islamic University と提携しており、毎年何人かの学生を派遣している。この提携は、アフマッド・アロント・ジュニア (Ahmad Alonto Jr.) の学長時代に結ばれたもので、彼の二人の娘ならびに姪も留学した。その一人ヌルシダ・アロントさんによれば、このマレーシアの提携校は半分以上が外国 (主としてイスラーム圏) からの留学生で、90 ケ国から留学生が来ていた。紛争中だったボスニアや、元ソ連領の中央アジアなどからも学生が来ていたという。なお、授業は英語で行われ教授陣はマレーシア人が多いが外国人もいた。

ところで、MSU 大学ではアラビック・スタディーズを開講しており、どの学部の学生も受講できる。

MSU は付属小学校、付属高校を持っており、そこでは、一般のカリキュラムのほかにイスラーム教育を取り入れた、マダリスという方式の教育が行われている。

MSUにはムスリム学生の組織、カトリック学生の組織、プロテスタント学生の組織がそれぞれある。学内にはモスクと並んで教会もある。近年ノン・ムスリムの学生の比率がだんだん増加しているという。

マラウィは圧倒的にムスリム人口が多い町ではあるが、1961年から Union Church Congregation of Philippines (UCCP)が運営しているアメリカのプロテスタント系のダンスラン・カレッジ・ファウンデーション (Dansalan College Foundation Incorporated) という学校が建てられている。その教員は以前はアメリカ人が多かったが今はだんだん少なくなってきたという。以前は大学まであったが今は高校と小学校 (primary school) だけで、生徒の多くはムスリムであるという。

マラウィ市の山の上に教会がある。

学術交流の可能性

上智大学の川島緑教授が既に以前からこの大学をベースに研究を続けておられ、日本との交流という意味では道筋がついている。

日本との学術的提携を考える時、恐らくもっとも多くの日本人研究者に関心をもたれるであろう部局は、キング・ファイサル・センター (King Faisal Center for Islamic, Arabic & Asian Studies) であろう。ここではイスラーム法研究 [大学院レベル]、イスラーム研究、アラビア語、国際関係論などが開講されており、バチェラーの学位を付与することができる。

もともと 1971 年に、教養学部 (Leberal Arts) に隣接したアジア・イスラミック・研究センター (Institute of Asian and Islamic (Arabic) Studies) として創設されたものだが、その教養学部とのつながりは切れて独立した college となった。1974 年にはサウジアラビアのファイサル国王の名を冠するようになった。フィリピンで始めてのイスラーム研究のセンターである。

ここではマレー語・インドネシア語の授業も行われている。たまたまハサン・カナ (Casan Datu Cana) 助教授が二年生のインドネシア語を教授しているところを見学させてもらったが、受講生は約 20 人。色々な学部から来ているということであった。同助教授はこのセンターのセンター長で、以前スラバヤに留学したことがあるということであった。報告者 [倉沢] は同教授ならびに受講生とインドネシア語で会話をしたが、残念ながら受講生達の理解力はあまり高いようではなかった。

次にジェンダー研究に関心のある研究者にとっては、女性問題研究センター (Center for Women Studies) も提携先として可能である。所長を務めるマルレーネ・ホッファー・タマノ (Marlene T. Hofer Tamano) 教授自身はカトリック教徒であるが、ムスリム男性とカ

イロ留学中に知り合って結婚した。彼女は MA も Ph.D (カイロ大学) もビジネス・アドミニストレーションで取得し、現在も本籍は経営学部にある。

ミンダナオ国立大学が学部生や院生の留学先として適当かどうかということであるが、もちろん英語で授業を受けられることや、自然に囲まれた静かな住環境が期待できること、などで、特にイスラーム研究を行うには絶好の大学であると思われる。マニラ周辺のカトリックの研究者に聞くと「マラウィは治安が悪いからやめたほうが良い」という回答が返ってきた。外国人は、身代金目的の誘拐のターゲットになると言うのである。そのようなことが絶対に無いとはいえないであろうが、過激なイスラーム教徒はごく一部であり、大多数がごく普通の穏健な人たちであることを考えれば特にイスラームに敵対的な行動をとったりしない限り大丈夫ではないかと思われる。ただ、女性はノンムスリムであっても服装等には十分配慮すべきである。それはどのムスリム・コミュニティに居住する場合でも同じことであるが、ヴェールはともかくも、長袖、長スカート・あるいは長いスラックス着用等は必須であろう。

ちなみに学費は、たとえば生物学科の場合、年額 160 ペソ、その他経費を入れて、半期で、300~500 ペソということであった。

聞き取り対象者

アフマッド・アラント・ジュニア (Ahmad Alonto Jr.) 教授

彼は大学創設者の一族で、自身 1980 年代の学長を務めた。コタバトの大学を卒業後カイロの American University で MA を取得し、さらにフィリピン大学 (UP) のロスパニオス校で Community Development を専攻し Ph.D を取得した。学長退任後の現在もなお、農学部の教授を務めている。

ちなみにアロント家はこの地域の名門で、彼の父アフマッド・アラント・シニアは、フィリピン大学法学部時代マルコスと同級生ではあったが、最終的にマルコスに反対し、アキノの People's power に参加した。その関係でアキノ時代改憲委員会 (Constitutional Commission) のメンバーでもあった。その父のアラウヤ・アロント (Alauya Alonto) は、この地域のスルタンで、南ラナオ州の知事も勤め、この地域一帯の住民に対して大きな影響力を持っていた。アフマッド・アロント氏はまた、マラウィ市にジャマイトゥル・フィリピン・アル・イスラミア (Jamiatul Philippine Al Islamiyah, JPI) というイスラーム学校を設立し教育者としても知られていた。

ヌルシダ・ウンダ・アロント医師 (Nurshida Unda Alonto)

アフマッド・アロント氏の娘で、同大学の交換プログラムでマレーシアへ留学した。

マルレーネ・ホフファー・タマノ教授 (Marlene T. Hofer Tamano)

女性研究センター所長ならびにスタッフ

ハサン・ダトゥ・カナ助教授 (Casan Datu Cana)

キング・ファイサル研究センター助教授ならびにスタッフ

女性研究センター・スタッフ数名

キング・ファイサル研究センター・スタッフ数名

MSU 卒業生

Abdullatif, Mohamad Alisar A. (男性) 生物学科卒 マラウイ市出身

Wedad L. Zainoden (女性) 生物学科卒 マラウイ市出身

Johanisa B. Alawi (女性) 動物学科卒 マラウイ市出身

Noranihar D. Mamari (女性) 動物学科卒 マラウイ市出身

Nashiba M. Daud (女性) 動物学科卒 マラウイ市出身

Sohaili L. Lagnindab (男性) 物理学科卒 マラウイ市出身